

日本一川幅の広い川（2537m）が、 埼玉県にあるわけとは？

—日本の河川事情—

■川幅日本一

長さが日本一の川といえばもちろん信濃川で、全長が367km、他にも流域面積が日本一の利根川、支流の数が日本一の淀川など川にはいろんな日本一がある。ちよつとマインナーだが、2008年、新たに二つの日本一の川が誕生した。

まず、和歌山県南部の那智勝浦町内にある粉白川の支流ぶつづつ川、水源から本流までわずか13・5mのこの川が2級河川に指定され、それまでの北海道島牧村のホンベツ川（全長30m）を抜いて、法定河川として日本一短い川に認定された。変わった名の川だが、川底からふつふつと清らかな水が湧き出てくるようすがその名の由来だという。

もうひとつの日本一は、埼玉県内を流れる荒川である。2008年2月、国交省荒川上流河川事務所の調査で、吉見町と鴻巣市の境の御成橋おなりふきんの川幅が2537mと計測され、それまでの徳島県の吉野川（2380m）を上まわって、日本一広い川幅であることが確認された。

通常、川幅がもっとも広くなるのは河口付近である。荒川も河口付近の川幅は約800mほどあり、東京湾に流入する河川の中ではもっとも広い。その河口から70km以上も遡ったところに川幅日本一の場所があるのはなぜだろうか。

■荒川は荒ぶる川

川幅の定義だが、国土交通省河川局では、河川敷を含む兩岸の堤防間の距離を川幅と規定している。

御成橋ふきんの荒川の堤防は、吉見町側へ湾曲するように大きく広がっている。ただ流路がそれだけ広くなっているわけではなく、このふきんの荒川の川面幅は普段30mほどだ。幅が2.5kmにも及ぶ広大な堤防間には、田畑や公園に利用されている河川敷が広が

っている。

じつはこの広い河川敷というのは日本の河川の特徴である。ヨーロッパからの旅行者が、新幹線を利用して東京から京都へ向かうとき、のぞみ号が富士川や天竜川の鉄橋にさしかかると、車窓からの見える川原の景色を見て不思議に思うそうだ。なぜ日本の川は真ん中だけにちよろちよると流れているのか、川原と呼ばれる石ころだらけのあの土地は何なのかと。確かにライン川やドナウ川の風景写真を見ると、水は川幅いっぱいに漫漫としており、川原などはない。しかし、日本の河川は季節によって流量が大きく変化し、しばしば氾濫をおこす。荒川の場合、年平均流量は毎秒26立方mだが、最大時にはその60倍になり毎秒1500立方mを超えることがある。川原つまり河川敷を広くすることは氾濫を防ぐための先人の知恵なのである。

荒川は秩父山系より、埼玉県内を流れ、東京湾に注ぐ一級河川である。語源は荒ぶる川、その名の通りの暴れ川で、過去幾度となく洪水による氾濫を繰り返してきた。明治末の1910年の大洪水では、数十カ所の堤防が決壊し、東京の下町8万5000を水没・流失させ、死者324名という未曾有の大災害を引き起こした。



平常時の御成橋ふきんの荒川

点線がもっとも外側の堤防で、最大幅が2537mある。



増水時の御成橋ふきんの荒川

堤防間の河川敷が調節池の役割を果たし、洪水を防いでいる。

<写真 国土交通省 荒川上流河川事務所>

この大洪水を契機に、首都東京を洪水から守ろうと、荒川下流部では1913年から20年の歳月をかけて、全長22km、幅500mにもおよぶ大規模な放水路（現在の荒川、

それまでの荒川は現在の隅田川が開削された。そして、中流域の埼玉県内でも、増水時に遊水機能を持たせて氾濫を防ぐため、河川敷を広げる工事が1934年から始められ、こちらはじつに37年の歳月をかけて、戦後の1953年によりやく完工した。荒川の広大な河川敷は、この時の改修工事で生まれたものだ。

荒川の氾濫が、たびたび大きな被害を出した原因の一つは、荒川の下流域が広範囲にわたって海拔の低い低地となっていることである。河口から約20kmの埼玉県境ふきんでも海拔はわずか2mほど、河口から40km上流のさいたま市ふきんで6mほどである。荒川は日本では珍しく、中流から下流まで高低差が小さい勾配の緩やかな川だ。

その特色を生かして、荒川には知られていない日本一がじつはもう一つある。それは水運、荒川は河川を利用した物資の輸送量が日本一の川なのだ。2007年までは、約30kmも遡って小型タンカーが埼玉県和光市まで石油を運んでいた。さすがに往年の活気は薄れたが、今もさまざまな資材を運ぶ船が荒川を往来している。

また、地上の交通渋滞に巻き込まれず、環境にも優しい水上交通は、近年見直されつつある。